

演劇ユニットFOX WORKS

歌い損ねたレクエイム

三島善太郎 (享年四五) 三島商会の会長。
三島燈子 (二一) 善太郎の娘。
三島仁太郎 (四二) 三島商会の社長。善太郎の弟
菱野和美 (二六) 仁太郎の秘書。
松下 (二三) 葬祭センター担当者。
死神六六号 (?) 善太郎の魂を担当する死神。本名小金井智久。
三島依子 (享年三五) 善太郎の妻。※写真のみ。
医者。 ※声のみ。

―一場―

春から夏へ移り変わる季節。一番体調に気をつかう時期ですね。

とある地方都市から約二十キロ北へ行ったり来たりした所にある山と海に囲まれた土地
「鹿ノ谷村」

ここがこの物語の舞台だったりするかもしれません。

暗転中です。

音楽が始まります。

音楽・二十三秒……

照明・メロディーの挿入にあわせて、台の上におかれている善太郎の

遺影だけがフェードインで照らされます。

遺影の善太郎は、免許証の写真のようにリラックスしているが緊張したような表情です。

音楽・四十六秒……

善太郎の娘、澄子が入ってくる。

澄子はその遺影を手にとると同時に地明かりがゆっくりとフェードイン。

澄子は、その遺影を悲しみでも哀れみでもない表情で見つめているようです。

仁太郎が手帳を見ながら入ってくればいいじゃないですか。

それと同時に和美が名簿を持って現れ、仁太郎にこれでいいかと尋ね、

了承を得ると出て行きます。

音楽・一分十三秒……フェードアウト

うろろうしている仁太郎。

そこへ、電話を手にした和美が入ってきます。

和美 「社長、禅水寺のご住職からお電話が」

仁太郎 「はいはい。いや、ちよつと後にしてもらえるか。掛け直すから」

和美 「すみません、後ほど掛け直しますので。」

（電話を切る）会長の戒名の件、どうしましょうかって」

仁太郎 「ああ、そうか。早いところ決めないとなあ。」

戒名って、お寺に頼むと高いんだろ？」

和美 「まあ……ピンキリでしょうけど」

仁太郎 「名前つけるくらいでなあ、もう」

和美 「最近は、インターネットで自動的に戒名決めてくれるやつもあるみたいですよ」

仁太郎 「おお！ そりゃ便利だな！ スマホからも行けるのか？」

和美 「やってみます！ えーと、三島……善太郎……。戒名は、生前の名前から一文字使う」

仁太郎 「じゃあ、『善』だな」

和美 「院号……ナントカ院ってやつですね。ここは檀家になつてるお寺に由来する場合もある」

仁太郎 「じゃあ、禅水寺さんだな」

和美 「最後は、故人の人柄を一言で……これはもう、『善人』ですよ！ いい人でしたから。」

慈善事業にも積極的だったですし」

仁太郎 「まあ、お人好しというか、天然というか」

和美 「あ、でました！……」

『善禅院善善善慈居士（ぜんぜんいんぜんぜんじこじ）』……」

仁太郎 「アニメか？」

和美 「何よ、つかえないソフト」

澄子 「あの……」

和美 「あ！ごめんね澄子ちゃん！ふざけてるわけじゃないのよ」

澄子 「わかってる。いいんじゃない？名前。ゼンゼン……ゼン……覚えやすくして」

仁太郎 「全然覚えとらんじゃないか」

澄子 「葬儀屋さんに任せたんじゃあ？」

仁太郎 「そうは言っても、こっちで準備せなならんことも多いんだよ？

ああもう、こういう段取り苦手なんだよ。

あ、そうだ！兄貴に相談してみよう」

和美 「そうですね！会長 こういう段取り得意ですもんね」

仁太郎 「何たって元町内会長だしな。じゃあ兄貴に……」

仁太郎と松下は仁太郎の遺影に目をやる。

仁太郎 「ああ……そうか……」

和美 「そうでしたね」

仁太郎 「ちよつと疲れてるのかな」

和美 「そうですね。あとのことは、会長に任せれば」

仁太郎 「そうだな！兄貴の葬式だし、兄貴に仕切ってもらえばいいか」

仁太郎と松下は仁太郎の遺影に目をやる。

仁太郎・松下 「ああ……」

澄子 「落ち着いてください！」

仁太郎 「いやすまん。どうもまだ実感が……」

和美 「そうですね」

玄関から、松下の声が聞こえてきます。

松下（声） 「失礼します」

和美がその声の方へ出て行きます。

仁太郎 「しかし、人間ってのはわからんもんだね。

兄貴と会社始めて、二十年ちよい。

（隣の部屋に視線）四五か……」

燈子 「仕方ないじゃない。あれでも人間だったんだし」

仁太郎 「あれって……」
燈子 「最後まで面倒かけさせて。全く」

和美がやってくるじゃありませんか。

和美 「社長、葬祭センターの方到着されました」
仁太郎 「そうか、お通しして」

和美 「会長にご挨拶してから。」

仁太郎 「そうか……ふう……すまんね。やることが山積みで頭がついていかんよ」

和美 「大丈夫……ですか？」

仁太郎 「和美さんこそ。ろくに寝てないんだろ？」

和美 「働いてる方が、気が紛れますから」

仁太郎 「(二、三度軽くうなづいて気持ちを切り替える)……で、燈子ちゃん。

葬儀のほうなんだが」

燈子 「普通で。こだわるような事でもないし」

和美 「会長——お父さんから、何か希望とかは？」

燈子 「自分の葬式の事なんか考えないって」

和美 「まあ……あの若さで亡くなるなんて(涙ぐむ)思ってたでしょうからね」

燈子 「もし自分で葬式出したら。とことんど派手にしろって言うだろね」

和美 「お祭り好きでしたからね」

燈子 「最後くらい大人しくしてほしいもんよ」

燈子 遺影を確認するのです。

その燈子に聞こえないように。

和美 「(仁太郎に) 燈子さん。まだ会長と仲悪かったんですね」

仁太郎 「まあ……、依子さん亡くなってから娘一人父一人だったしな。

難しいところもあったんだろ」

燈子 「偉そうに……。気に食わない顔。嫌な奴ってのは顔に出るもんね」

和美 「でも根は悪い人じゃなかったですよ」

仁太郎 「変わり者だったけど、行動力は人一倍あったな！行動力だけは！」。

和美 「だからこそ、東京の会社辞めてまで、我が三島商会をここまで

盛り立ててこられたんですよ！」

燈子 「どうだか。人に指図されんのが嫌だっただけなんじゃない？」

和美 「そんな事は……ないんですかね？」

仁太郎 「ノーコメント」

燈子 「あいつは、物事を深く考えずに行動して、悪運強く生きたクズよ」

仁太郎 「あいつって……お父さんもあれで……」

燈子 「善太郎の事をお父さんなんて呼びたくない」

仁太郎 「いや、だからね……」

そこへ、葬儀屋 松下の声が聞こえてくるんです。

松下 「ごめんください」
和美 「あ、どうぞお」

松下 入ってくるじゃないですか。

松下 「失礼いたします！」

和美 「お世話様です」

松下 「はい！ あ、すみません」

和美 「どうぞお座りください」

松下 「あ、はい。すみません！」

松下 その場に正座するのです。

和美 「座布団ありますから」

松下 「（立つ）あ、あの、すみません」

和美 「座ってください」

松下 「あ、はい。すみません！ あの、すみません」

仁太郎 「落ち着いてください」

松下 「お見苦しいところを失礼しました。私『ヴィエンダール葬祭センター』の
松下と申します」

名刺を取り出して渡す松下さん。

和美 「ヴィエンダールって、結婚式場じゃありませんでしたっけ？」

松下 「この春から、ブライダル部門の系列で葬祭部門ができたんです」

和美 「へえ……」

松下 「実はこの前までブライダルの担当だったんで。」

すみません。まだこっちの現場が……」

和美 「そうなんですか。松下さんって方はまだいらっしゃるんですか？」

松下 「はい。松下はブライダルの方で……お知り合いなんですか？」

和美 「以前お会いした事が。元彼と式場の相談しに行った事があるんです」

松下 「あら！ そうだったんですかあ！ それはそれは……元彼？」

仁太郎 「まあとにかく！ 突然の事でこっちも何をどうしたもんか……。」

「一つ宜しく願います」

松下 「心中お察しします。お辛いでしょようか、早速葬儀のご相談のほうに」

燈子 「構いませんよ」

松下 カバンの中からパンフレット類を取り出す。

松下 「（緊張）えー……あの、えー……、（パンフレットを見ないで）この度は……」

突然の事で、お悔やみを申し上げます」

一同 「(お辞儀)」

松下 「(パンフレットを見て) このめでたい行事に」

「？」

松下 「私どもの喜びもひとしおでございます」

「はあ……？」

松下 「それでですね。まず登場の仕方は如何致しましょう？」

燈子 「登場の仕方？」

松下 「オプシオンで神輿に担がれて入場なんてのもありますし、

少々お値段は張りますが、空中からブランコに乗ってくるのですとか、

先日は捕らわれの花嫁をターザンスタイルで助けに来ると言う演出……」

仁太郎 「あのちよつと。何ですかその葬式」

「え……あらヤダ！カタログが違う。すみません。」

松下 「こちらは結婚式のカタログでした！」

燈子 「結婚式……脅かさないで下さい」

松下 「すみませんッ！ これ先月まで使っていたもので！ ホントすみませんッ」

「あの……本当にターザン——」

松下 「では改めて確認させていただきます」

松下 軽く咳払い。

松下 「喪主は……」長女の、三島燈子さん」

「はい」

松下 「世話人の方が……」

仁太郎 「私です」

松下 「三島仁太郎さん。亡くなった善太郎さんの弟様ですね」

仁太郎 「あと一応、会社関係ということ」

和美 「秘書の菱野です。経理なんかのお役に立てればと」

仁太郎 「大体費用としては幾らくらいなんでしょうか？」

松下 「そうですね。相場としては、大体二百万前後って所でしょうかね」

燈子 「二百万……」

仁太郎 「まあ、そんなモンでしょう。母ちゃん時も結局香典でトントンだったしな」

松下 「ご香典は、まあ親戚の方が一人一万円、会葬者の方が

一人五千円くらいの見通しですかね。ご自宅での密葬というお話でしたが……」

仁太郎 「ええまあ、社葬でやっても良かったんですが、どうせ自宅も兼ねとるんで」

「無駄に広いしね」

燈子 「なるほど。当日は当社の方から音響も用意できますので。」

最近は、BGMを流す方式も流行ってますし、選曲もお任せできますよ。

進行はプロが行いますんで」

燈子 「お願いします」

松下 「祭壇の方は、(カタログを開いて置く) シンプルにと言う事でしたので、こちらのセットでよろしかったですね」

燈子 「はい」

松下 「まあ他にもラインナップとしては色々種類がありますが。

何かありましたらどうぞ遠慮せんくださいね。

うちではできる限り、故人の方の意思を尊重しようと思っておりますので」

燈子 「いえ、特に。ちゃっちゃと済ませたいので」

仁太郎 「（カタログを読んで）ほお……色々あるんですね」

和美 「この、石棺で……石の棺ってことですよね？」

松下 「エジプトマニアの方から依頼されて、半分シヤレで用意してみたんです。

御影石と大理石で」

和美 「使われた事あるんですか？」

仁太郎 「いや、これじゃ火葬場で燃やせんだろう」

松下 「それ以前に、持ち運ばませんでした。一個で、一トンありますんで。

いやー、うっかりうっかり。あはははは……あ……失礼」

和美 「この赤い派手なものもそうなんですか」

松下 「はい。こちら総ヒノキ製でして、全体に朱色の輪島塗を施した贅沢な一品となっております」

仁太郎 「（桁を数える）十、百、千……こんなに！？」

松下 「通称『フェラーリ』と呼ばれています」

燈子 「あいつは軽トラで十分です」

松下 「ご結婚もご葬儀も、他にはない特別なおもてなしで。というのが社訓ですから。

ちなみに今年から、ご結婚の際にご葬儀の先行予約もできるシステムになりましたね。

こちら『死が二人を分かつまでキャンペーン』となっております」

仁太郎 「ほ……ほう……（和美に）大丈夫なのかこの会社」

和美 「任職さんのご紹介ですから」

松下 「あと遺影についてなんです……」

仁太郎 「いただきました」

仁太郎は燈子が磨いていた遺影を手にして、棚の上に飾ります。

仁太郎 「（眺めながら）……すごいですねえ。本当にスーツ着てるみたい」

松下 「本当にとは？」

燈子 「社員証の写真だったんです。作業服着た」

和美 「まじめなお顔のが、それしかなくて」

松下 「最近は合成で何でもできますからねえ」

松下 カバンから封筒を取り出します。

松下 「あ、お預かりしていた他のお写真です。お返しします」

和美 「すみません。慌てたものでゴチャゴチャなままで」

松下 「いえいえ。楽しそうなお人（思い出し笑い）ふははははははは」

松下 「松下さん？」

和美 「あの、本当にターザン……」

床には、開いたままのカタログと写真の入った封筒。

―二場―

死んだはずの善太郎が、不思議そうな顔をしてやってくるじゃないですか。簡単に備えられた自分の遺影を眺めるのです。家族の写真を、触ろうとしても触れずに複雑な表情をしています。

善太郎 「……妙な気分だ」

善太郎 自分の遺影をまじまじと見つめます。

善太郎 「……これが俺の遺影!? 辛気臭いなあもう」

善太郎 その中の一枚、依子さんの写真に眼を向ける。

善太郎 「依子……、俺どうしたらいい?」

善太郎 床に置いてある封筒を手に取り、中から一枚の写真をとりだします。その瞬間のことです。

善太郎 「だははははははははははは! 何だこの顔ッ! いひひひひひひひひひひ!

どこのバカが——俺か……!」

やがて、カタログに気付いてしまいました。

葬祭のカタログに描いてあるキャッチフレーズを読みます。

善太郎 「『人生最後の旅立ちに……』……。そうか、やっぱり俺死んだのか……」

善太郎 カタログをめくります。

善太郎 「ふーん……ん?……:フェラーリ?」

そこへ、和美、仁太郎、葬儀屋の話し声が聞こえてきます。

仁太郎 「じゃあ、細かい事は菱野と相談していただいで」

松下 「一応、世話人の方には方針を決めていただきたいので」

仁太郎 「ところで…、喪主についてなんですけどね。ちよつと心配で」

松下 「お若いのにしっかりされてますねえ。大抵は皆さん取り乱されていて、

いつも苦勞するんですよ」

仁太郎 「ああ…その…亡くなった兄と彼女はちよつと、仲が…ね」

松下 「よろしくなかったんですか？」

仁太郎 「ええまあ。父親がちよつとラリパツパだったせいか、あの子も苦勞してね」

松下 「ユニークな方だったみたいですね」

仁太郎 「というより、ちよつと困った人でしたね。こんなときに言うのもなんですけど」

善太郎 「何だと!？」

仁太郎 「トラブルメーカーと言うか。ま、商売人としてはいい面もあったんでしようが」

善太郎 「仁太郎…お前、一人で飲んだときにお兄ちゃんとやってこれてよかったって

泣いてたじゃないか!」

仁太郎 「実際、生前は兄の尻拭いでだいぶ苦勞したものですわ」

善太郎 「なーにーをおう!?!?!その口を縫い付けてやろうか!」

仁太郎 「———?」

松下 「どうかしました？」

仁太郎 「いや…今、急に不愉快に…」

和美 「会長が怒ってらつしやるんじゃないですか。

あんまり悪口言うとか化けて出ますよ」

仁太郎 「いやあ、兄貴の事だもの。逆に狼狽えてるんじゃないやな？」

善太郎 「———!」

仁太郎 「そうそう、いつだったかね…（話し続けるマイム）」

善太郎 「言ってくれるじゃないか仁太郎…!」

残り 「あつはつはつはつは!」

松下 「ごめんなさい。こんな時に不謹慎ですけど、それはいわゆる、アレですよね？」

仁太郎 「そう、アレ」

和美 「アレって何ですか？」

善太郎 「何ですか!」

松下 「やっぱりアレですよね？」

仁太郎 「そう、バカ」

松下 「失礼ですよ、まだ隣で寝てるんですから」

仁太郎 「違いますよ、寝てるんじゃないの。死んじゃってるの!」

三人 「わーはっは…」

仁太郎 「（間髪入れず）これは笑えないわね」

微妙にしんみりする三人。

和美 「それで、当日までの概算をざっと計算してみたんですけど…」

何かを話し合い始める三人（マイム）

善太郎 「チクショウ……、どいつもこいつも好き勝手言いやがって……」

善太郎 話を続けている三人の間に入り、見えていないのをいい事にはしゃぐ。全く反応しない三人。ここは見えてるけど見えない演技をする役者さんと、何とかして笑わせてやろうとする善太郎役との戦いですので存分にどうぞ。
がんばる善太郎。

その努力が無駄に終わって

和美 「じゃあ、そういう事で」

松下 「解りました。あ、ちよつと住職さんともお話ししてきますんで」

和美 「じゃあ。私ちよつと連絡してきます」

二人が出て行って、残った仁太郎。

善太郎の遺影をまじまじと見つめる。

善太郎 「弟よ！ 兄ちゃんは悲しいぞ！ お前が俺のことをそんな風に思ってたなんて！」

仁太郎 「どんな気分だ？ 兄貴」

善太郎 「どんな気分だってお前……。見えてるのか？」

仁太郎は遺影を手に取ります。

仁太郎 「全く……、タイミングよく死んでくれたもんだ。兄貴」

善太郎 「……仁太郎？」

仁太郎 「ごめんな……。凄く悲しいんだけど……。悪く思わないでくれ」

善太郎 「どういうことだ」

そのとき、入り口側で、和美が星明子のように覗いています。

和美 「社長」

仁／善 「(同じ動きで飛び退く) ぎゃああ！」

「なんだ、和美くんか。脅かさなくてくれよ」

善太郎 「……(兄弟だなあ)」

和美 「本気じゃないですよね」

仁太郎 「何が？」

和美 「本気で澄子さんの……！……遺産を奪うんですか？」

仁太郎 「人聞きの悪いこと言うな。あの子がすっかり落ち着くまで管理するんだ」

和美 「でも……」

仁太郎 「君もわかっているだろう？ 今の三島商会の状況を。」

不渡りとは言わないが、苦しいことにはかわりない。

せつかくまとまった金が入ってくるんだぞ？」

和美 「だからって、父親が娘に残すお金を」

仁太郎 「大丈夫だって！ このビジネスが軌道に乗れば、

何倍にだってして返せるんだから」

善太郎 「仁太郎」

和美 「じゃあ、本気で会長の土地も売るおつもりなんですか」

善太郎 「土地？ 俺の土地って三島神社のことか？」

仁太郎 「あんななんの金にもならない土地、持っててもしょうがないだろう」

善太郎 「馬鹿野郎！ あの神社は……」

和美 「相手の明石建設には、色々と良くない噂も……」

善太郎 「明石建設って、汚職でニュースになったところじゃないか」

仁太郎 「別に三島商會がどうにかなるわけじゃない。土地を売り抜くだけだ」

和美 「ですが、あの森は会長が……」

仁太郎 「ゴミ同然のあの森が売れるんだぞ？ すごいぞー！

本格的なリゾート施設に生まれ変わるんだから！

温泉に、スポーツジム！ ゴーカーのサーキット！

明石建設は行政にも顔が聞くからな。

やがてはこの街も、もつとポップで先進的な名前に変わって……」

和美 「燈子さんが何と言うか」

仁太郎 「あの子は父親の意見なんか聞かんよ。丸め込むのは簡単」

善太郎 「仁太郎……」

仁太郎 「ビジネスチャンスはね。義理や感情に振り回されちゃつかめないのさ」

和美 「社長……」

仁太郎 「これでも、私はサイドビジネスで飲食店を三件も警営した経験があるからな」

善太郎 「全部潰れたけどな！ っていうかそのせいで会社が赤字になったんじゃないか！」

和美 「社長。今ならまだ間に合いますから、考え直してください。」

会長だってこんなこと、悲しむはずです」

仁太郎 「……兄貴は死んだんだ。もういないんだよ」

和美は無言のまま立ち去ります。

仁太郎 壁に飾られている写真を眺めながら

仁太郎 「昔から、兄貴はいろんな人に好かれててさ、

うちの会社も兄貴のおかげでお大きくなったようなもんだ。

もし生きてたら、俺のやることに反対するだろ？

いつだって兄貴が正しいんだもんない？

面倒見てくれてさ……俺は、本当にアンタが邪魔だったよ」

善太郎 「……」

仁太郎 「悔しいだろ？ これからは全部俺の物だ。

会社も、家族も。俺が見ていくんだ……」

仁太郎 奥の部屋へ出て行く。

善太郎 「ええ……？ 何今の……。何今のラスボス感」

—三場—

そこへ燈子が入ってきます。

善太郎が写真に手を伸ばすのとほぼ同時に燈子が写真を拾い上げてサイドボードの上に乗せます。

次の瞬間、燈子は善太郎に気づきます。

善太郎の顔を穴が開くほど見つめる燈子。そりゃあ驚きますよね。

燈子 「……………（約五秒）！」

善太郎 「お、よう！ トーコ。えーつと……見えてる？」

燈子 「（首を激しく横に振る）」

善太郎 「ああ、なん（だ）ー見えてるじゃないか！」

燈子 「見えない！」

善太郎 「見えてるよね」

燈子 「絶対見えない！」

善太郎 「ほんとに？」

燈子 「ほんとに！」

善太郎 「ほら見えてる」

燈子 「しまった！」

善太郎 勝利の笑み

燈子 「何……？ 何なのよ……！」

善太郎 「？」

燈子 「何でアンタ、ここにいるの！？」

善太郎 「……いや、俺ん家だし」

燈子 「そうじゃなくて！ だって……だって！」

（善太郎が死んだ事のアピールジェスチャー）

善太郎 「お前、日本語が不自由になったのか？」

燈子 「死んだでしょ……！ 死んでる！ 死んだのになんで居るのよ！」

善太郎 「大騒ぎするなよ。たいした事じゃないだろ

こういう時は『お父さん！』『娘よ！』——ヒシッ！

燈子 「アンタまさか、アレなの？」

善太郎 「アレって何だ」

燈子 「認めたくないけどやっぱりアレよね」

善太郎 「だからアレとか言うなよ」

燈子 「アレは要するにアレなんでしょ……幽霊！」

善太郎 「……パパと呼びなさい」

燈子 「嘘でしょ……本当に幽霊……？」

善太郎 「まあ、肉体を超越した存在を表す記号的な名称としてそう呼ばざるを得ない……

(格好つける) そうッ……幽霊デス☆」

燈子 「サラッと見えよ！」

善太郎 「フッ！」

燈子 「だけど……なんで……こう」

善太郎 「？」

燈子 「なんか、生き生きしてる」

善太郎 「何だよ、人間死んだら生き生きしてちゃいけないなんて事あ無いだろう！

それとも何か？ 人は死んだら死に死にしてなきやいけないのか？

(キレる) 何だ死に死について……！！」

燈子 「知るか——ッ！」

言い争う二人。

和美がやってくる。

和美 「燈子さん？」

燈子 「——あ……っ！ 和美さん」

和美 「あの、お話したいことが……」

燈子 「和美さん！そこ！」

無駄に可愛らしく手を振る善太郎。

和美 「そこ？ タンスがどうかしたんですか？」

燈子 「タンスじゃなくてその……、見えないんですか？ あれ」

和美 「どれ？」

善太郎 「俺！」

和美 「写真ですか？」

燈子 「だからあの……」

和美 「ああ、会社設立記念に社長を池に落とす後の写真ですわね」

善太郎 「あー、捻挫して全治一週間だったけ？」

燈子 「じゃなくて……」

和美 「それは、町内の盆踊りでやぐらから社長を突き落とす時の写真ですわね」

善太郎 「酔ってたからね。肩脱臼して全治十日だったかね」

燈子 「本当に見えないの？」

和美 「ああ、それは自宅が完成した時に社長を屋根から突き落とす時の写真ですわね」

燈子 「(善太郎に) あんた何やってんの！」

善太郎 「嬉しくてつい」

和美 「燈子さん。突然こんな事になって……私、会長が亡くなられたなんて……(泣く)

まだ実感が……！」

燈子 「(善太郎を見て) 私もです」

善太郎 「(泣く) 私もです」

和美 「色々、お辛いでしょうけど。(手を取る) 気をしっかり持って下さいね」

善太郎 「そうだぞ！」

燈子 「(善太郎に) うるさい！」

和美 「えっ」

燈子 「いや、和美さんの事じゃなくて——」

和美 「そうですね。。。こういう時に優しくされるのって、逆効果ですよ」

燈子 「そうじゃなくて……」

和美 「ごめんなさい。私、燈子さんの気持ちも汲み取れなくて」

善太郎 「マズいぞー、この娘泣き出すと止まらないからな」

燈子 「あ、あのね和美さん……」

その言葉を振り切って、隣の部屋へ駆け込む和美。

善太郎 「あーあ」

燈子 「何しに出てきたのよ。善太郎！」

善太郎 「トーコ。自分の父親を名前で呼ぶもんじゃないぞ」

燈子 「幽霊でもなんでもいいから、とつとと消えて！」

善太郎 「燈……」

燈子 「いつもそう……、いてほしくない時にばかりつきまとって！」

善太郎 「私はアンタの顔なんかも見たくないんだよ！」

燈子 「生きてる間は好き勝手に生きて、勝手に死んで、後始末で大変な時に死んでまで

私の人生に入り込まないで！どっか行ってよ！」

善太郎 「……(ため息)。そうか、解ったよ。迷惑かけたな。自分でも死んだって

事が認められなくて、せめて最後に一目お前の姿が見たいと思って

来たんだが……。すまなかった」

善太郎に背を向けている燈子。

燈子 「(移動する) ちゃんと消えるよ。じゃあ、元気だな」

燈子 出て行く。

しばらくして、燈子が振り向くと、善太郎の姿は無い。

燈子 「善太郎……」

辺りを見渡した後、善太郎の遺影を手にする。

少しだけしんみりする燈子。

そのとき、突然善太郎が戻ってくる。

善太郎 「探せよおっ！」

燈子 「やっぱり！」

善太郎 「もつと、追うとかしろよ！」

燈子 「冗談じゃない」

善太郎 「何だ何だ。せっかく、お前の事が心配で戻ってきたのに、ずいぶんな態度じゃないか」

燈子 「自分がしてきた事考たら、いくらアンタだって解るでしょ」

善太郎 「俺が一度でも、お前に『勉強しろ』『早く寝ろ』『テレビを見るな』

なんて言った事があつたか？俺はいつだって、

お前を尊重する父親であろうと努力したつもりだぞ」

燈子 「ただの恥よ！」

善太郎 「そこまで言う事無いだろ」

燈子 「小学校の頃、私のお年玉で競馬行って大負けしてくるし」

善太郎 「倍にして返そうと思ってたんだよ」

燈子 「お母さんが亡くなってからはもつと酷い。女遊びは激しくなるし」

善太郎 「女遊びっておい。やだねー若もんは、何でもかんでもやらしい方向に考える」

燈子 「中学の時は、英語の家庭教師に来てた大学生と一晩中飲んで説教するし。

しかもあの人、学校やめちやつたじゃない」

善太郎 「だって、本当は俳優になりたいんですって言われたから、自分の信じる道を行きなさいって諭しただけだよ」

燈子 「高校の時は三者面談で担任の先生を口説こうとするし」

善太郎 「だって綺麗だったんだもんっ！いやー、あの涼しげな目元がなんとも……」

燈子 「大学入試の時は、景気付けしてやるからってアンタの作った料理食べたら、

食中毒にかかるし……だから落ちたのよ！」

善太郎 「悪かったって。熱通せばとりあえず大丈夫だと思っただけどね」

燈子 「とにかく。アンタは……」

そこへ仁太郎が入ってくる。

仁太郎 「燈子ちゃん」

燈子 「は、はい！」

仁太郎 「和美さん見なかった？」

燈子 「あ……えーっと」

善太郎 「泣ーかした！、あそーれ泣ーかした！あよいしよ……」

燈子 「（善太郎に威嚇）シャーッ！」

善太郎 「……せめて何か言葉を使えよ」

燈子 「（仁太郎に）何ですか？」

善太郎 「ハイ無視ッ！」

仁太郎 「ちようどいい、ちよつと話があるんだけどね」

燈子 「話？」

仁太郎 「こんな時に話すのもなんなんだがね。

お父さんの遺産やら保険金のこと、

このままだと燈子ちゃんが相続することになるわけなんだが」

燈子 「はあ」

仁太郎 「どうだろう……それなりに大きなお金で管理も難しいし、

相続税は下手をすればかなり持って行かれて、マイナスにもなるかもしれない。

そこで、一旦お父さんの土地や財産を、会社名義にさせてもらえないか」

燈子 「会社に？」

仁太郎 「そう、特にお父さんが三島神社を立てた土地については、いい話が来てるんだ」

善太郎 「燈子！耳をかすな！絶対に失敗するから！」

仁太郎 「実は、あの土地を最高級リゾートに生まれ変わらせようって計画があつてね！」

善太郎 「けっ……なーにがリゾートだ」

燈子 「それがおじさんと何の関係が？」

仁太郎 「そのリゾート計画に、三島商会と企業提携をしないかかって話があるの！」

善太郎 「よくある話じゃないか。どうなるか予想ぐらいつくだろう」

仁太郎 「組織の質はリーダーで決まるもんだ。私なら、会社をもっとより良い形に出来る。

亡くなった兄さんも、天国でそれを望んでいるはずだ」

善太郎 「どーだか」

仁太郎 「燈子ちゃん！必ず！三島商会をもっとビッグな会社にしてみせるから」

燈子 「はあ……」

善太郎 「よく聞け燈子。仁太郎と俺と、どっちを信じるんだ」

燈子 「（仁太郎に）がんばって下さい」

善太郎 「ノー！」

仁太郎 「ありがとう！」

死神の声が玄関から聞こえる。

死神 「ごめんください」

仁太郎に断って、出て行こうとする燈子。

その後を追う善太郎。

善太郎 「お前即答か！少しは俺の話を——」

燈子は、善太郎を軽くにらんだあと出て行ってしまふのです

善太郎はそのあとを追いかけます。

— 四場 —

仁太郎 「（戸惑いも見えない）ふ……。これでいい……。これでいいんだ」

一人で悪者笑いをしている仁太郎。
悪いです。悪い笑い方です。

仁太郎 「ふふふふ……（大笑いをしようとする）あーっは……」

そこへ突然和美が泣きながら駆け込んできます。

和美 「（大泣き）わあああああっ！」

仁太郎 「あ、あれ？ 和美ちゃん？。どうしちゃったのかな？」

和美さんは仁太郎の腕に思いっきりしがみつきます。

仁太郎さんは体制を崩します。

和美 「しゃちよお！ 私ダメな女なんですうう！」

仁太郎 「何で？ ていうか君酔ってるね？」

和美 「（泣きながら説明するので何を言っているのか解らない）」

仁太郎 「うん、ゴメン全然わかんない。落ち着いて」

和美 「私はただ、燈子さんの力になってあげようと思っただけなんです。でも、反って彼女の神経を逆撫でしてみたいで、

これじゃあ、私空気の読めないイタイ女じゃないですかああっ」

仁太郎に泣きすがってポカポカ殴る。

仁太郎 「痛い痛い痛いッ！解ってる。君はよくやってる！」

和美 「私、昔から勉強もスポーツも人一倍努力して、

男にだって負けないようにやってきました」

仁太郎 「うん……、別に君の人生はどうでもいいから！

あ！それ御供えのお酒！」

そこへ、善太郎が戻ってくる。

善太郎 「厄介な奴が来たなあ——（状況を見て）え——！？」

和美 「何？ 男ってそんなに偉いの？ 女より上だなんて決まってるっていうんですか！」

仁太郎 「痛だだだだだだだだ！」

和美 「苦しむのはいつも女なのよおおっ」

和美さんたら、仁太郎の首を締め上げて前後に激しく揺さぶっちゃいます。

仁太郎 「苦しい……！ 苦しいから……っ！」

和美 「社長のことも止められないし！私はどうしたらいいのか」

仁太郎 「だから大丈夫だって！ 心配することないから！」

そこへ燈子がやってくる。

燈子 「おじさん、お客さんで——何やってるんですか！」

仁太郎 「あ…いやいや、ちょっとね」

燈子 「(仁太郎に気づき)…何、まだいたの？」

和美 「(自分の事だと勘違いします) そんな冷たい言い方…！」

和美は床に突っ伏して泣きます。まるで拝んでるみたいですね。

燈子 「え？ あ、いや今のは——(和美に) 和美さん？…寝てる」

仁太郎 「疲れてるんだらう…しばらくそっとしておこう…で、誰だって？」

燈子 「さあ、小金井さんって方なんですけど」

善太郎 「あ、やべっ！」

燈子 「？」

—五場—

善太郎 別の部屋へ隠れる。

そこへ、喪服姿の死神がやってくる。

死神 「すみません。突然、失礼します」

仁太郎 「どうも、失礼ですがどちら様で…？」

死神 「あ…、私 三島善太郎さんと個人的に親しくさせて頂いた者です。

この度は突然の事で…」

燈子 「どうもご丁寧に。すみません、お通夜は明日になると思いますが」

死神 「(辺りを見回し) そうですか…。とりあえずお顔だけでも…」

(和美に気づく)…あの、こちらの方は？」

仁太郎 「え…？ あ、あッ、あの…(腕時計を見て) あらッ？ もうこんな時間だ！

すみませんね。ちようどこっち(和美の頭の向き)の方向に

聖地があるもんで」

死神 「…あ！ そういう宗派の方なんですか？」

仁太郎 「ええまあ。あ、じゃあこちらへ」

死神 仁太郎に案内されて仁太郎の寝ている部屋へ。

燈子は突っ伏している和美を気遣おうとします。

燈子 「えーと…和美さん？ 大丈夫ですか？」

善太郎 死神から逃れられたんで一安心して、燈子の背後に忍び寄ります。

善太郎 「(低音で) 泣いてたんだよ」

燈子 「わあっ!」

善太郎 「ぎゃっはっはっはっはっは! 『わあっ!』だって! マジウケルンデスケド!」

燈子 「(善太郎に) いい加減にしてよ! この疫病神!」

和美 「(目覚める) 疫病神!？」

燈子 「あ、起きた!」

和美 泣き出す。

和美 「やっぱり私はダメな女なのよー!」

善太郎 「またか」

泣き出した和美に狼狽える燈子。

和美 「私、昔から勉強もスポーツも人一倍努力して、男にだって負けないようにやってきたんです」

燈子 「別に和美さんが悪いわけじゃなくて…(善太郎に) どうしちゃったの」

善太郎 「彼女の悪い癖なんだよ。傷つく酒かつくらって自分の人生嘆くの。」

悪い娘じゃ無いんだけどね」

和美 「私だって、もっと素敵な女になりたかった! 朝のスタバで、

カフェラテなんか飲みながらタブレット眺めるのが似合う女になりたかった。

ソリューションって言葉とか、使ってみたかった」

善太郎 「うちじゃぜったい使わんな」

和美 「我が社では、三日に一度はソリューション…とか言ってみたかった」

燈子 「どういうこと?」

善太郎 「多分ソリューションの意味を知らないんだと思う」

和美 「でも…こんな田舎じゃスタバどころか、吉野家の朝食がいいところ」

善太郎 「おいしいじゃないの」

和美 「いいのよ、私はもう…(笑う) ふ…。あ、ごめんなさい。ちょっと電話してきます」

燈子 「(善太郎) あの…」

善太郎 「心配するな。いつものことだ」

燈子 「あんた、いつまでいる気?」

善太郎 「トーコ…冷たいなあ。もうちょっと悲しむとかなないのかよ」

燈子 「悲しんで欲しいなら悲しんで欲しいなりの態度してなさいよ!」

善太郎 「マツチを、誰かマツチを買ってはくれませぬか」

燈子 「気持ち悪い!」

善太郎 「さつきから親に向かってちよつと言いすぎなんじゃないかな?」

燈子 「親って…今まで散々放ったらかしにしておいて、

どのツラさげてそんなこと言えるのよ」

善太郎 「放ったらかしたなんて人聞きの悪い」

燈子 「私が付き合った彼氏の数覚えてる？」

善太郎 「いない！」

燈子 「はあ？」

善太郎 「お前に彼氏なんかいない！認めない認めない！」

燈子 「何言ってるの！私だって……」

善太郎 「（耳を抑えて）聞こえない聞こえない！いないっいたらいないー！」

燈子 「私の誕生日は？」

善太郎 「え？」

燈子 「（カレンダーを指差す）私の誕生日！仕事だ仕事だって

一度も祝ってくれなかったじゃない」

善太郎 「……（カレンダーを全体的に示す）この日……」

燈子 「広いわ！っていうか、せめて見て指さしなさいよ！」

善太郎 「しょうが無いだろ？ 長期出張から帰ったら生まれてたんだもん！

おれだって悔しかったよ！」

その様子を、和美がまとも見えています。

和美にとっては燈子が一人で騒いでいるようにしか見えません。

和美 「あの、燈子さん……」

燈子 「和美さん……お酒は？」

和美 「もうスッキリしました。さっきはなんだか失礼なこと言ったみたいで、すみませんでした！」

燈子 「いえ、別に。和美さんこそ大丈夫ですか？」

和美 「ええ。迎え酒したら、良いが冷めました」

燈子 「迎え酒？」

和美 「実は、うっかりこれを」

和美は酒瓶を差し出します。

善太郎 「それは！ 大事ににとっておいた斗瓶どりの大吟醸おり酒！」

和美 「お供え物だったみたいなんですけど、つい我を忘れて」

燈子 「これ一升瓶ですよね？」

和美 「これ美味しんですよ」

燈子 「みたいですね」

善太郎 「フルーティな香り、爽やかな酸味の中にほんおり甘み！

炭酸がまるでシャンパンのような風味の」

燈子 「だからうるさいってば！」

和美 「あの、燈子さん。さつきからどうなさったんですか？」

燈子 「あの…実はその…、いるんです」

和美 「いるって？」

燈子 「善太郎が、今ここに」

和美 「…え、それは」

燈子 「変なこと言ってるのはわかります！でも本当なんです！ほら！」

和美 「あ…！そうなんですか！それは、きっと燈子さんが心配で

出てきてらしてるんですね」

そういう和美の声は軽い。

燈子 「本当なんですってば！」

和美 「うん、信じるわよ燈子さん（熱をはかる）」

燈子 「熱なんかないってば」

和美 「うんうん。きっと社長も寂しんですね（腕を調べる）」

燈子 「怪しい葉はやってません！」

善太郎 「すごいな。セリフと行動が伴ってない」

燈子 「本当ですってば！今だってここに」

和美 「そうですねー。会長！ いるんですか」

善太郎 「和美くん」

和美 「会長！」

善太郎 「こっちこっち！」

燈子 「信じてくれてないでしょ」

和美 「…燈子ちゃん、私ももう一度会長にあえたらどんなにいいか。

もつと、一緒に仕事をしたかった。話したいことも、教えてほしいこともたくさん。私も感じます。会長がまだここにいてるって」

と、和美は話しながら、ことごとく善太郎にかぶります。

善太郎は位置を変えますが、ことごとくかぶります。

善太郎 「（燈子に）これ（俺のこと）見えてるよね？」

和美 「社長、聞こえますか？ ああ、そうですか

善太郎 「こっちこっち！」

燈子 「あの、信じてませんよね？」

和美 「そんなことないわよ」

善太郎 「嘘をつくとき、耳を触る癖変わってないなあ

燈子 「耳を触ってるから嘘だって。」

和美 「……何でそれを」

燈子 「本人がそう言ってます。

和美 「まさか、本当に……」

燈子 「何でそんなこと知ってんだか」

善太郎 「ああ、それは……」

和美 「お付き合いしていたんです。私たち」

燈子 「へえ。ええええええ？」

善太郎 「（首を振る）」

和美 「私、結婚まで考えてた相手に振られて、どん底だった事があって。

死じゃおっかなとか思ってた時に、会長と出会ったんです。

それでこの会社に」

善太郎 「ほう、そんなことが」

燈子 「何で覚えてないのよ！」

善太郎 「いやほら、町内会の会合で昼間から飲んでたから」

和美 「自暴自棄になってた私に、会長が」

善太郎 「（その時のことを言う）」

和美 「って」

燈子 「それで!？」

和美 「その言葉で、私、もう少し生きてみようって思ったんです」

善太郎 「あれで!？」

和美 「でももう一つ、私はその会長の姿を見て、

もう一度誰かを愛してみようと思ったんです」

燈子 「それで付き合うことに？」

善太郎 「そうだったんですかあ」

燈子 「どこがよかったんですか、これの。寂しさからの勘違いってやつじゃ」

和美 「あいつに、似てたから」

燈子 「それって……」

和美 「わかってます。あいつの代わりだってことは」

燈子 「あいつって？」

和美 「大事な……死んだ大事なやつに、似ていたんです。善太郎さんが」

燈子 「ああ……そういう」

和美 「ジョン……」

燈子 「ジョン？」

和美 「ええ、ジョンにそっくりだったんです」

燈子 「へえ……ジョン……（善太郎を見て）て言うより、おにぎりみたいですけど」

和美 「子供の頃から一緒だった、犬」

燈子 「犬？」

和美 「はい、パセットハウンド。雨の中で震える会長……善太郎さんは、

ジョンそっくりで」

善太郎 「あの、どういう状況だったんでしようか？」

和美 「本当に生き写してみたいで、特ににおいが」

燈子 「におい？」

和美 「やだ、今会長がいらつしやるんですよ！ 恥ずかしい」

善太郎 「(いないいない)」

燈子 「あ、いやその…もう消えました」

和美 「そんな！…そんな。ひどいです善太郎さん。私を置いていくなんて、ずるいです、燈子さんだけ。ねえ！ 何とかして

もう一度出てこられないんですか？」

燈子 「何とかって？」

和美 「こう、何かに乗り移るとか」

そこへ、蚊が一匹飛んできます。

思はずその蚊を叩き潰す和美さん。

和美 「……会長おおお！」

燈子 「いやいやいや」

和美 「うわああああん」

燈子 「あ、あの、まあ…善太郎も和美さんに倒されるなら、本望なんじゃ？」

和美 「燈子さん！」

燈子 「はい！」

和美 「社長は！ とんでもない事をしようとしています！」

燈子 「とんでも無い事って？」

和美 「私、止めたほうがいいでしょうか？」

燈子 「それは」

和美 「止めた方がいいですよね！」

燈子 「何を」

和美 「社長と話し合ってください！」

和美が仁太郎を追いかけます。

燈子 「…何が？ ヒントが何も無い…」

― 六場 ―

善太郎 「だから言ってるだろ？ 仁太郎の話は信用するなって」

燈子 「いい加減邪魔しないで！」

善太郎 「トーコ…お前だつて解ってるんだろ？ 自分の意見じゃないんだろ？ 俺に反発するために下らない見栄を張るなよ」

燈子 「…見栄って… (言葉が続かなくなる) あ…さつき、

和美さんと付き合ってたって、どういうこと？」

善太郎 「付き合ってたって、普通に話したり、食事したりするだけで、

お前が考えてるようなことはしてないから」

燈子 「……考えてない！」

善太郎 「とにかく、俺はこんな計画認めないからな」

燈子 「あんたの意見なんか聞いてない！」

善太郎 「……：……：……：……：……：……：……：……：……：……：……」

俺……一生懸命やったつもりだったんだけどさ……」

燈子 「……」

善太郎 「教えてくれよ……。それが知りたくて来たんだ」

燈子 「……うざいのよ。私に興味なくせに『いい父親です』って顔しないでよ」

善太郎 「トロー……」

燈子 「その目……学校行かなくても、仕事しなくても、叱らないし」

善太郎 「叱って……欲しいのか？」

燈子 「いつもそうやって、困った顔して。私の事なんかどうでもいいくせに」

善太郎 「バカ言うな。お前は自慢の……」

燈子 「お母さんが死んだ時だって……あんたほんとに悲しんでたの？

葬式のとくに全然泣いて無かったよね？」

善太郎 「……どうだったかな」

燈子 「あんたって結局そういう人間なんだ。自分が一番大切に、

どんなに仲良くしてるようにしてても、すぐに忘れる。母さんの事だって」

善太郎 「忘れたかったよ」

燈子 「……」

善太郎 「そうできたなら、どんなに楽か。高校からだぞ？ 意外に純愛だろ？」

燈子 「……：……：……：……：……：……：……：……：……：……：……」

そこへ、死神が堂々と現れる。

死神 「それはまずい兆候ですね」

燈子 「あ、さっきの」

死神 「『こちら』の世界に物理的に接触できるようになりましたか」

燈子 「はい？」

死神 「もういい加減いいでしょ」

燈子 「何がですか？」

善太郎 「俺に言ってるんだよ」

燈子 「え？……見えてるんですか？」

死神 「ええ」

善太郎 「そりやそうだ。だってこの人死神だもん」

燈子 「へえ、死神……ええええ……っ……」

死神 「ああどうも、ご紹介が遅れました（名刺を取り出す）私、三島善太郎さんの担当

をさせていただいております、死神六六六号。小金井智久ともうします」

燈子 「……：……：……：……：……：……：……：……」

死神 「で、三島さん。もう行きますよ！」

善太郎 「もうちよつと待ってくれよ！ 今日中には帰るから」

死神 「駄目です」

善太郎 「一生のお願い！」

死神 「あなた自分の状態わかってますか！？」

善太郎 「そこは一回死んだということ」

死神 「だからね！」

燈子 「あの……本当に死神……？」

死神 「そうですね！」

燈子 「へえ……なんか、意外と……普通」

死神 「……何か問題でも？」

燈子 「死神って普通はもつと悪魔っぽいでしょ。でもあなた普通すぎる。

つまり普通すぎて普通じゃない。むしろありえないくらい普通」

善太郎 「そうそう！ 普通は普通じゃなくて普通だから普通すぎるのは普通で……ふ……

(混乱して半ギレ) 普通だツ……！」

死神 「フツウフツウって人を電話みたい……。大体ね、

アンタら人間は妙な偏見持ち過ぎなんですよ！

そもそも我々死神は亡くなった方の魂を刈り取って

迷わないように天国まで導く農夫なんですよ！それを——痛たたたた

(うづくまる)「

燈子 「何か？」

死神 「失礼……胃が弱いんです。神経がちよつと……」

善／燈 「うーわかつこ悪！」

死神 「カッコわる……(自分に言い聞かせます) 怒るな怒るな？

アナタはやれば出来る子だぞー愛美……！」

出来る出来る！ 君なら出来る！ あたしガンバツ！

(態度を変えます)「——とにかく善太郎さん。今すぐ私と旅立って下さい」

燈子 「そうだ、それがいい」

善太郎 「だってこいつの言ってる天国つてのに魅力ないんだもん」

死神 「何ですか。私が用意した天国はあちらでも並以上のランクなんですよ！

間取りも機能的だし、2LDKですよ2LDK！見晴らしもいいし……

もうすぐ新幹線だつて——」

燈子 「ちよつと……何その不動産屋みたいな紹介の仕方」

死神 「ですから、三島善太郎さんに分譲される天国地区のお話を」

燈子 「え？ 天国って分譲されるもんなの？」

死神 「まあ、時代の流れって奴ですか」

善太郎 「な？ 魅力ないだろ？」

死神 「何を言いますか！

自然のままの公園を抱き、駅から徒歩一分の利便性！

南向きの日当たりを中心とした健康的な住宅郡！

あなたのアフターライフをサポートする。
ウエルカムッ！おいでませッ、天国へ！

CMを終えた死神は満足そうに善太郎たちを見る。

燈子 「…いや、そんな…『どうだ！』みたいな顔されても」

死神 「もうすぐ新幹線も通りますから！」

善太郎 「どこからどこに行くんだよ！」

死神 「細かいことなんかどうでもいいじゃないですか！」

善太郎 「タチ悪い…！」

死神 「じゃあ善太郎さん。これ以上何が望みなんですか！？」

善太郎 「…：：：地味」

燈子 「は？」

善太郎 「だって俺が死んだんだよ？ 国民の祝日にしたっていくらじゃないか？」

燈子 「どんだけ偉いのよアンタは！」

善太郎 「なんていうかなあ…：、 暗い暗い！

ただでさえ重い空気がさらに重くなるじゃないか」

燈子 「葬式ってのは普通そうでしょ」

善太郎 「まずこの写真！ まさかこれが遺影になるのか？」

燈子 「そうだよ」

善太郎 「暗いじゃないの。俺はね、こう見えても周りから『笑顔が素敵な人』って言って、もらいたいんだから」

死神 「言われてないんですね？」

善太郎 「もつとこう明るい写真にしてくれよ」

燈子 「わがまま言わないの！ この死にぞこない！じゃなくて！死んでぞこない！
…：死んで…：生き…：何！？」

そこへ、松下が出てきます。

松下 「あの、す…：すみません」

燈子 「…：はい」

松下 「すみません。ご遺体を移動させますんで、すみません手伝っていただけますか」

燈子 「わかりました」

松下 「すみません」

燈子 松下についていきます。

死神 「なんか…：大変そうですね」

善太郎 「俺にもあんな時期はあったさ。無性に親が鬱陶しくなるんだ」

死神 「やっぱり、（善太郎を見て） 遺伝ですかね」

善太郎 「…：違っよ」

死神 「いやいやいや！ あれはどー見たって……」

善太郎 「違うんだよ」

死神 「……え……？ (だんだん理解します) ええッ！？ それは……ッ……その……」

善太郎 「(黙って頷く)」

死神 「……だって、高校からの知り合いだって……」

善太郎 「多分、お互い好きだったんだろうけど。何も無かった。ほら、あるだろ？

そういう事」

死神 「はあ……」

善太郎 「俺は都会で仕事して、二十五の時にこっちで依子と再会した。

……彼女が妊娠してた」

死神 「まさか、それが……？」

善太郎 「(黙って頷く) ……誰にも相談できなくて悩んだ。で、俺は依子にプロポーズし

た」

死神 「……何ですか？」

善太郎 「さあ……。何でなんだろうな？ 今でも不思議に思うよ。ふふふ……」

死神 「じゃあ……本当の相手は……」

善太郎 「あいつは言わなかったし、俺も聞かなかった」

死神 「……この事、娘さんは？」

善太郎 「なんで？」

死神 「いや、何でってそりゃあ……(自分を指差す) 調べる事も出来ませんが」

善太郎はただ軽く笑うだけです。

善太郎 「女はずるいよな。『生んだときからお母さん』だもん。男は、

『父親にならなきゃ』いけない。……難しいんだこれが」

死神 「善太郎さん……」

善太郎 「少し、独りになっていいかな」

死神 「……ごうぞう」

善太郎は軽く肩を落として出て行きます。
死神はしばらく複雑な顔をしていましたが、

『ハッ！』っとして、

死神 「——逃げられたッ！」

そこへ、燈子が出てきます。

燈子 「あ、アンター！」

死神 「……ど、ど、ど」

燈子 「(死神に) とつとと連れてってよ！ 絶対マズい事になるから」

死神 「確かにマズいですね……善太郎さんのこの世に対する執念が強くなってきている。

このままでは、あの世に行く事がきずに不成霊となつて、最悪の場合、悪霊化してしまうかも」

燈子 「善太郎の……悪霊」

二人の想像。

悪霊化した善太郎が出てこようとする。

不気味な音楽でも流れたらいいかもしれません。
でもすぐに音がやみます。

死神 「怖すぎて想像できない！」

善太郎はちよつと残念そうに引つ込みます。

燈子 「どうすればいい？」

死神 「わかりました。二手に分かれましょう！ こうなったら最終兵器だ！」

死神はU字型の磁石を取り出し、燈子に渡す。

死神 「（口でドラ○もんみたいな効果音）！はいどーぞ」

燈子 「（受け取って）……何これ？」

死神 「磁石です！」

燈子 「……これは……、私が考へてる使い方でいいのかな？」

死神 「これで、捕まえて。説得してみます」

燈子 「説得なんかいいから、強制的に消す道具とかあればいいのに（と去ろうとします）」

死神 「えッ！？ ちよつとちよつと……！」

燈子 「なんですか！」

死神 「えと……あの、私今まで色々な方を担当させていただいてますが、

早く連れて行けなんて言われたことがないもんで」

燈子 「だから？」

死神 「仮にも、人の死にかかわらることですから、

何か恨みでもあるんですか？」

燈子 「別にそんなんじゃ」

死神 「三島さんからは、娘が悲しんでるから一目会いたって言われたので」

燈子 「……そう」

死神 「何か、あつたんですか？」

燈子 「……なんで連れてきたりしたの？」

死神 「はい？」

燈子 「なんでこっちに連れてきたりしたのよ」

死神 「それがその、ちよつと成り行きで人生相談みたいになっちゃって、
三途の川の屋台で」

燈子 「三途の川に屋台……」

死神 「うまいんですよ、人の懐に入るのが。さすが経営者ですね。
で、いろいろ悩みを聞いてもらってるうちにうっかり許可しちゃって、

娘が心配で仕方がないから、最後に一度だけ合わせてほしい、
きつと悲しんでるからって」

燈子 「蓋を開けたら暴走じゃん」

死神 「あああッ。私ってなんでこうダメなんだろうなあ！

イタタタ…胃が。ああもう…死にたい」

燈子 「それはあんたが言っちゃダメでしょ」

死神 「まあ、捕まえるのも方法ですが、本人が満足すれば勝手に現世から消えるので、
何か、思い残したことがあるんでしょう。あなたとの事とか」

死神は、意味ありげに燈子を見つめます。

燈子 「……私の事を見なかったのは、善太郎のほうよ」

死神 「というと？」

燈子 「私、中学ぐらいからあんまり人生うまくいってなくてさ、
高校もロクに行かなかったし、仕事も……。ま、嫌な事もあったからさ。
でも、善太郎は私の事ぜんぜん叱らないの。

ただ、好きに生きればいって言うだけで」

死神 「それは、燈子さんの事を信じているからじゃ」

燈子 「違うわよ。ただ興味がないだけ」

死神 「そんな事」

燈子 「三島依子って知ってる？ 私のお母さん。もう十年前にそっちに行ったけど」

死神 「私の担当ではなかったのよ」

燈子 「心臓が弱くてね。最後はいろんなチューブに繋がれて、
でも眠るように病院で。その時見ちゃったの。お母さんの血液型。

気にした事なかったけど。善太郎は……」

死神 「B型ですね？」

死神と燈子は見つめあつてうなづく。

燈子 「私はO型で、お母さんはAB。…私たちは、本当の家族じゃなかった」

死神 「…！」

燈子 「あいつ、知らないと思ってるんだろうな。ほんと私の事見てないんだから。

わかる？ 私の事なんか興味ないのよ。」

その証拠に、お母さんが亡くなってからずっと、私と話なんか…」

死神 「うわ」

燈子 「え？」

死神 「うわ…！」

燈子 「何？」

死神 「あ、いやその…どうしましょうかね？」

燈子 「私こつち、あんたそつちね！…不思議ね、あんなやつでも、

死んだらちよつとは悲しいのかなと思っただけど、

全然そんな事ない。やっぱり他人だからかな」

そう言って、燈子は出て行きます。

後に残された死神さん。

死神 「うわあ…。ええ…？ (いろいろ考えを巡らせますが、ややこしさに気づく)

あちやあ…えらいところに来てしまった。イタタタ…ああ、胃が」

死神はぶつくさと言いながら出て行きます。

―七場―

入れ替わりに電話をしながら仁太郎がやってきます。
手には一冊のファイル。

仁太郎 「はい、はい。ええそうなんです。名義変更について書類はまとめていますので。

そうなんです、これから通夜の準備が。

…いえそんな、わざわざ来ていただく事は、はい…ああ、下見も兼ねてですか。

わかりました(電話を切る)」

仁太郎は、ファイルに目を通します。

仁太郎 「あとはこれを…」

その時、ファイルのページから写真が溢れ落ちます。
仁太郎はその写真を拾い上げます。
観客には見せませんが、これは会社を始めた頃の仁太郎と善太郎なのです。

仁太郎「……………」

ここから、当時の回想にそのまま入ります。

善太郎「会社やりたい？」

仁太郎「うん、ずっと考えててさ。兄貴もこっち戻ってきてフラフラしてるくらいなら」

善太郎「フラフラってなんだよ」

仁太郎「再就職まだ決まってるやないんだろ？な！どう？」

善太郎「何の会社だよ」

仁太郎「ひまわりの種だよ」

善太郎「種？」

仁太郎「ひまわりの種は、健康食品として優秀なんだ！

加工して油にも化粧品にもなる。ほら、自治会と相談して、

鹿野谷村と一緒に事業する事になったんだ」

善太郎「懐かしいな。昔よく遊んだな」

仁太郎「よく川に突き落とされた」

善太郎「けどさ、金はどうすんだよ」

仁太郎「会社辞めた人間が三人で起業すると、助成金が出るんだよ。

俺と、兄貴と、東山の小暮さん」

善太郎「えー？小暮ってなんか変なビジネスばかりやってるやつだろ？

それは却下」

仁太郎「じゃあ、どうするんだよ。もう一人」

善太郎「あてがない事もない」

仁太郎「あてって？」

善太郎「俺の嫁さん」

仁太郎「は？」

善太郎「俺結婚する」

仁太郎「結婚!？」

善太郎「うん、だからさ。お前と、俺と、俺の嫁さん。これでいいだろ」

仁太郎「いや、まあ……」

善太郎「あ、でも嫁さん肉体労働はしばらくダメだぞ。

子供産まれるから」

仁太郎「子供」

善太郎「そりゃ夫婦ですもの、子供ができたりもしますわよ」

仁太郎「子供出来たって、何だよ？」

善太郎「何でってお前、保健体育で習わなかったか？おしべとめしべが……」

仁太郎「そういうことじゃなくて、いつ付き合ってたんだよ」

善太郎「……………ま、そういうわけだから。あ、あとさもう一つ。」

会社のついでに、ここになんか作ってくれよ」

仁太郎 「何かって？」

善太郎 「神社とか。いいなあ。三島大社」

仁太郎 「神社って」

善太郎 「あと、社長はお前な？ 俺会長」

仁太郎 「はい？」

善太郎 「俺、社長業とか書類とにらめっこするの苦手だから。

お前得意だろ？ そういうの」

仁太郎 「そんな適当な」

善太郎 「よし、やろう！ 会社」

仁太郎 「だけどさあ、自分で言いだしといてなんだけど、

会社やってくつてのはそれなりに……」

善太郎 「大丈夫だ。なんかあったら、兄ちゃんがついてる」

写真に目を戻す仁太郎

仁太郎 「とか言って、いつも苦労するのは俺だったよな。なあ兄貴」

仁太郎が振り向くと、そこに善太郎はいない。

仁太郎 「……」

仁太郎は、ファイルを机に置くと、何かを書き始めます。

時々手を止めますが、決意して書き続けるのです。

そこへ、善太郎がやってきます。

善太郎 「ちよろいな！ 簡単に騙されやがって……仁太郎」

善太郎は仁太郎の書いている書類を見つめます。

善太郎 「これは……おい仁太郎！ お前何しようとしてるのかわかっているのか！？」

書き終えた仁太郎は、懐から印鑑を出し、その書類に印を押そうとします。

善太郎は思わずその手を止めます。

仁太郎 「……？ あれ？……あれ？」

仁太郎は必死で印を押そうとしますが、善太郎は阻止します。

そうやって問答をしている間に、松下さんが入ってくるのです。

松下 「すみません……仁太郎様？」

仁太郎 「ぐぬぬぬぬぬ」

松下 「どうしたんですか」

仁太郎 「いや、なんかその……」

やがてその手はクルリと回り、松下の額にハンコを押します。

仁太郎 「……」

松下 「……これは、なんででしょうか？」

仁太郎 「あああああッ！ すみません！ 私もどうしてだか！」

松下 「私何かお気に触ることも？」

仁太郎 「違います違います！ すみませんこっちに洗面台ありますんで」

仁太郎は慌てながら松下を連れて行きます。

善太郎 「（手を見て）……あれ？ お？ おお？」

善太郎は、仁太郎が残っていた書類やペンを持ってみます。
触れることに感動する善太郎は、遺影を自分の笑顔のものと取り替えます。

善太郎 「うん！……（悪い顔）よおーし！」

善太郎は出て行きます。

― 八場 ―

入れ替わりに和美が入ってきます。

和美 「社長！……どこいったんだろう」

和美は机に開きっぱなしの書類を見つけてます。

和美 「（読んで）……これは……」

そこへ、死神の声が聞こえてきます。

死神の声 「見つけた――！」

和美 「……！」

和美は、書類をもって別の部屋へ去っていきます。
その入れ替わりに磁石に善太郎をくっつけた善太郎を死神が連れてきます。

善太郎 「離せつてばもう！」

死神 「とうとう人にとりつくようになってしまったか！」

善太郎 「なんだよ。やつと慣れてきたところだったのに」

死神 「善太郎さん！ お願いです。これ以上こっちの世界に干渉しないでください」

そこへ燈子が現れます。

燈子 「マズイんだよね？」

善太郎 「トーコ……」

死神 「まあ、限りなく赤に近い黄色つてどこですかね」

善太郎 「だから、葬式を俺の注文どおり盛大にやってくれたら、俺だって心置きなく」

死神 「お祭り気分で作るようなもんじゃないと思いますよ」

善太郎 「いいじゃないか。ほら、カタログにも書いてあっただろ？」

『故人の意思を尊重します』って。（自分を親指で指差す）——俺ッ！

燈子 「俺！——じゃない！もう成仏してよ。こっちは迷惑してるんだから」

善太郎 「そんな事言っちゃってー。本当は俺が死んで……」

燈子 「せいせいしてるわよ！あーホントに良かった！」

善太郎 「……」

燈子 「いいじゃない。私は私で勝手にするから。アンタなんかいなくても全然良い！」

死神 「ちよ……それはいくらなんでも」

善太郎 「……どこで、間違えたかな……」

燈子 「ゴメンね！？ 出来の悪い子どもで！」

善太郎 「……俺のせいだよな……」

燈子 「ふん……そうやって同情させるんだ？ いつも」

善太郎 「……死神さん。行こうか。……こないほうが良かったのかもしれない」

死神 「でも……」

善太郎 「悪い子じゃないんだ。でも、俺がいると……嫌な人間になる」

燈子 「……」

死神 「……だ、駄目です！」

善太郎 「え？」

燈子 「何で？ 本人が行くって言ってんだから」

死神 「いや、でも駄目です！ 中途半端に未練を残した状態であちらに行くと、

その……厄介なことになります」

燈子 「厄介なことって？」

死神 「えー………溶けます」

善太郎 「えっ！？ 溶ける！？」

死神 「はいもう……テロツテロになります」

善太郎 「テロ……初めて聞く溶け方だ！」

死神 「というわけで、きつちり未練を果たしてください！」

燈子 「最初と言ってること変わってない？」

死神 「……そういうわけで、燈子さん！」

燈子 「何ですか？」

死神 「善太郎さんがスムーズに成仏するために、

彼の願いを出来る限り叶えてあげましょう！」

燈子 「いい加減にしてよ！」

死神 「燈子さん」

燈子 「なんであたしがこいつの願いなんか聞かなきゃならないの？」

死神 「いやでも……」

燈子 「こいつの願いなんか単純よ。お母さんにもう一度会うこと」

善太郎 「……」

燈子 「そうでしょ？ だったらいいじゃない。向こうでもう一度、

夫婦水入らずで暮らせば？」

死神 「燈子さん……」

燈子 「本当は私が……」

そこまで言いかけて、燈子は言葉を止めます。

燈子 「お願いだから早くいなくなつて！」

燈子はそのまま出て行きます。

死神 「あ、ちよつと燈子さん！」

死神は、思わず燈子を追いかけていきます。

一人になった善太郎は依子の写真を手に取ります。

善太郎 「……依子。俺もそつちに行くことになった。

ごめんな、約束守れなかったかもしれない。

やっぱりそばにいない方が良かったのかもな。

あの子は、どんな君に似てくるよ。

仕草も、笑い方も、文句言うときだつて。

君を見てるみたいで、俺は……俺はもう。

後で聞かせてくれよ。どうして君の方が死んだんだ」

― 九場 ―

そこへ、仁太郎が汗を拭き拭きやつてきます。

仁太郎 「やれやれ……やつと取れた（座つて）あれ？ 書類が？」

和美が飛び込んできます。

和美 「社長！」

仁太郎 「おう、和美君！調子は……」

和美 「（契約書を突きつける）どういうことですか！」

仁太郎 「……それは……」

和美 「この契約が本当なら、リゾート施設が赤字になったら、全部を投資した人間が補うことに……。危険すぎますよ！」

仁太郎 「大丈夫だよ！絶対に成功するから！」

和美 「そうそう、この後明石社長がいらっしやるそうなんだ」

和美 「こんな時に何言ってるんですか！それに、それにこれ！」

三島大社も潰すつもりなんですか！」

仁太郎 「それがなんだって言うんだ」

和美 「あの神社がどういう物がお分かりですよね！」

仁太郎 「ああ……解ってる。もともとは私たちが遊んだ場所だ。」

和美 「昔はただの森だね。不思議な力があるって母ちゃんも兄貴も言ってた」

和美 「子供の頃どんな病気や怪我也、あの森で遊び回ってるうちに治ったって」

仁太郎 「ああ……イオンが大量に出てるとか何とかでな」

和美 「それを、会長は、依子さんの療養のために残してあったんでしよう？」

森だけじゃなくて神社で祀れば、ずっと残しておけるからって。

仁太郎 「会長にとってあの森は、依子さんとの……それに社長との思い出なんですよ！」

和美 「死んだ人間の事をいつまでも蒸し返すな！」

思い出？それが何になるっていうんだ！依子さんは結局死んだし、

兄貴だってもう居ない！」

善太郎 「……」

仁太郎 「子供の頃からそうだ。兄貴は正しくて、私のために何でもしてくれる。

外面は良かったからな。でも確かにそうだよ。いい兄貴だったよ！

私は兄貴の影を踏んで歩くだけ。……兄貴は私の事を見下してた」

善太郎 「バカ言うな」

仁太郎 「今だって、見ろあの憎ったらしい——（遺影を見て）うわあああッ！」

和美 「？」

仁太郎 「笑ってる！兄さんの遺影が笑ってる！」

善太郎 「あ！」

和美 「きつと、あれが会長の本質です。いい加減でだらしない人でしたけど。

人を見下すような事は絶対にしない人です！善太郎……会長は言っていましたよ。

仁太郎は、俺の悪いところを直してくれる。だから安心してなんでも任せられる

んだって。きつと一生頭があらないって。

会長が会社でも、人生でも一番信頼していたのは、社長！あなたなんですよ」

仁太郎 「……」

少し間があつて、仁太郎の携帯がなります。

仁太郎 「はい。あ、明石社長。え？もうお着きになったんですか！

直接契約の話をもうですか？」

和美 「社長……」

仁太郎 「(和美に) ……物事の進化には、スピードが必要なんだ」

和美 「社長！」

仁太郎 「はいぜひ——」

善太郎 「仁太郎……」

その声に反応する仁太郎
少しの沈黙。

仁太郎 「——お断りさせていただきたいと思えます！

は？なんで？ あはははは。

だいたい、人の家族の葬式に契約の話しに来るってどういう了見でしょうか！
バカにするのも大概にしていたきとうございます！

お宅様のような性根の腐った方々とお付き合いするほど
頭のネジは緩んでおりませんので！

おとといお越しく下さいこのクソ野郎！」

仁太郎は電話を切ります。

和美 「社長……」

仁太郎 「……なんか、兄貴に恨まれそうな気がして。あーあ、勿体無いことしたな」

和美 「(微笑む) そうですね」

仁太郎 「会社の借金、結構大変なんだ。どうしたもんか」

和美 「何とかありますよ。生きてるんですから！」

仁太郎は善太郎の遺影(?)を手に取ります。

仁太郎 「……また邪魔された……、最後の最後まで兄貴に邪魔されたよ。

本当に迷惑な奴だ。何でだよ……何でなんだよ」

善太郎 「仁太郎」

仁太郎 「なんで死んだんだよバカ兄貴！」

善太郎 「……」

仁太郎 「勝手に死んでんじゃねえよ。お前どうすんだよ？

会社も、燈子ちゃんも、……俺も残して……！

本当に最低な奴だよ！無責任で、自分のケツも拭けないくせに。
こんなことなら、生きてるうちに一発殴っとくんだった！

どんな気分だ？ ……これからは全部俺が見るんだ……。

会社も、燈子ちゃんも……俺が見るから……俺が見てやるから。

いつか、向こうに行ったら、ぶん殴ってやるんだ。

クソ兄貴……！ お前なんか大嫌いだ。……大嫌いなんだ……！

置いていくなよ……置いていくなよ馬鹿野郎……」

仁太郎は涙をこらえきれず。

善太郎 「ごめんな」

仁太郎 「今更……！」

和美 「社長」

仁太郎は落ち着きを取り戻します。

仁太郎には、善太郎の声が聞こえたのでしょいか？

仁太郎は少しあたりを見回しますが、

仁太郎 「さあ、仕事しようか」

和美 「……はい！」

仁太郎と和美が出て行きます。

呆然とする善太郎。

そこへ、死神がやってきます。

死神 「あ、よかった。いた」

善太郎 「なあ、小金井さん」

死神 「なんですか？」

善太郎 「死ぬと、涙は流せなくなるのかな？

それとも、俺が冷たい人間なのかな」

死神 「なにかあったんですか？」

善太郎 「生きてる時に、もっと話しておけばよかった」

死神 「善太郎さん？」

善太郎 「……すこし、ひとりになっていいかな？」

死神 「……はい」

善太郎が去ろうとしますが、

死神 「（善太郎を磁石で捕獲）とはならない！」

善太郎 「あっ！クソ！今いけそうな感じだったのに！」

死神 「同じ手が二度も通じると思ったんですか！」

そこへ燈子が飛び込んできます。

燈子 「でかした死神！」

死神 「ありがとうございます！え？今、年下になんか言われた？」

燈子 「さっさといけ死神」

死神 「あの、もうちょっと敬ってもらえ……イタタタ」

胃の痛みが再発した死神。
その隙に善太郎が逃げます。

燈子 「あ！ちよつと！（追いかけます）」

死神 「イタタタ……イタ……（二人の様子を見ます）。すこし二人になればいい」

死神は別の出口から出て行きます。

― 十場 ―

その入れ替わりに、仁太郎と松下がやってくる。

仁太郎 「先ほどは失礼いたしました」

松下 「いえ、ちよつとびっくりしましたけど。それでその……」

仁太郎 「何か？」

松下 「はい、あの、すみません。こちらの注文表の事なんですけどね」

仁太郎 「注文表？」

松下 「カタログに付属している、葬儀の要求なんです……けど」

そこへ、燈子が善太郎を磁石でくつつけてやってきます。

善太郎 「何するんだよ！おいおいおい！」

燈子 「まったく！」

松下 「祭壇は一面を金箔で覆い、お線香の代わりに線香花火。

両側にひまわりを敷き詰めて、LEDのイルミネーションで飾ること。

棺の中はドライアイスのスモークと、善太郎さんの誕生石で敷き詰めること。

あと……」

仁太郎 「……なんですかそれは？」

松下 「故人の方のご意思だと、娘さんのご署名が」

燈子 「（善太郎に小声で）こいつ……！」

松下 「ちなみに、善太郎さんの誕生石がコンクリートということになってますが」

仁太郎 「いや、コンクリートって」

燈子 「（善太郎を睨んだまま）そうなんですよ！ぜひミキサ―車で

流し込んでください！」

松下 「あとは、レーザ―光線がほしいとか」

仁太郎 「レーザ―って」

松下 「他にもいろいろと……本気ですか？」

燈子 「そうですね。やっぱ無理ですよね。そんな目茶苦茶な葬式」

松下 「まあ……」
善太郎 「いや待て！ほら故人の意思を尊重します！つて」

善太郎はカログをめくって指をさします。

燈子 「動くな！」

松下 「(カタログを見て) ……出来ます！」

燈子 「はい？」

松下 「レーザーも花火も、故人の方の御意志なら。なんとかします。

燈子 「いや、だけどこの内容は……大体レーザー光線ってどうやるのよ」

松下 「大丈夫です！ブライダルの演出で機械はありますから！僕が頼んでみます」

燈子 「いやその……」

松下 「見てみたいんです。こんなお葬式」

仁太郎 「葬式と言つていいのかどうか」

松下 「幸せな方だったんですね。善太郎さんつて。亡くなった後も、

人を樂しませたいつて気持ちしが伝わってきます。そうでしょう？」

燈子 「え……そうですかね？」

松下 「僕！人を幸せにしたくてこの仕事を選んだんです。

亡くなった人を幸せに出来たら、それつて最高じゃないですか！」

燈子 「そう……ですか」

松下 「いいお葬式にしますから！喪主のご要望、全て叶えてみせます！

ちよつと現場でシミュレーションしてみませんか？」

仁太郎 「そうですね。いやー彼女も冷静じゃなくなつてるから……」

松下と仁太郎が出て行きます。

燈子 「一体どんな注文したのよ」

善太郎 「いいじゃないか。……俺の最後の晴れ舞台なんだ。みんなの記憶に残るような、

インパクトのある式にしたいんだよ。死んだからつて悲しまれるよりは、

笑つて見送つてもらつた方がいい」

燈子 「……やりすぎ！」

善太郎 「人を亡くした時つてな。記憶が無いんだよ。誰がいて、自分が何してたかもな。

俺は、忘れて欲しくない。俺の最後のわがままだ」

燈子 「母さんの事も……覚えてないんですよ」

善太郎 「覚えてるさ。母さんの笑い方、困つた時の癖も、寝相の悪さも、

ほんの少し見せる仕草も。(燈子を見つめる)」

燈子 「なに？」

善太郎 「いや……そういや、お前とこんなに話すのは久しぶりだな」

燈子 「……生きてる時より死んだ後の方が沢山話してるなんて」

善太郎 笑顔の写真をとり

善太郎 「な、やっぱり遺影はこれがいいんじゃないか？。

笑顔だし。大きさもちょうどいい」

燈子 「何やってる時の写真？」

善太郎 「これは：・お前が生まれた時に病室から仁太郎を突き落とした後のだ」

燈子 「本当に何やってんのよ」

善太郎 「あ、コレも飾っていいか？」

燈子 「それお母さんの写真じゃない」

善太郎 「いいじゃないの、ひな祭りみたいで。男雛と女雛つぽく」

燈子 「祝ってどうすんの」

善太郎 「自慢したいの！俺にはこんなきやわいいカミさんがいたって」

燈子 「ったくもう：・」

善太郎 「大体普通通りじゃあまりにも華が無い。ただでさえ重苦しい空気だったのにさらに悲しくなってくるじゃないか」

燈子 「いや、お葬式つてのはそういうもんだから」

善太郎 「いいじゃないか、大事な物を添えるんだ。最後までいわがまま言わせてくれよ」

燈子が善太郎の写真を飾ろうとした時、何かに気付いて額縁を外す。
中からすこし昔の写真を見つける。
それを開いて、燈子の表情が変わる。

善太郎 「どうした？」

燈子 「いや：・なんでも。私の昔の写真で、（周りの写真を眺めて）少ないなって」

善太郎 「三島大社にある」

燈子 「え？」

善太郎 「お前、小さいころものすごい高熱で死になっただ。おばあちゃんなんて、山向こうの土地神さんまでお百度詣りにいったんだぞ？

で、お前が治って。
燈子 はかわいいから、山の神様に狙われてるんだ！ってさ。
昔はあちこちにあっただよ。攫われないように子供を隠すって風習」

燈子 「それで？」

善太郎 「ま、すぐお百度できるように神社も作ったことだし、

お前が大人になっただら見せようってさ。

まあ、一枚くらい母さんが持ってたかもしれないけどな」

善太郎は後ろを向き、並べられた写真を眺める。

善太郎 「（振り向かず）燈子：・。俺は、どんな風に死んだんだ？」

燈子 「：・：・：・」

善太郎 「（振り向かず）よく覚えてないんだ：・一人で釣りしてて：・」

燈子 「転んで、頭打ったんだってさ」

善太郎 「そうか：・、でかい引きだったからなあ」

燈子 「私の事、誘ったよね。電話で」

善太郎 「ああ」

燈子 「あの電話に出てたら……」

善太郎 「トーコ……」

燈子 「私が……もし行つてたら……そしたら！」

善太郎 「燈子……そんなこというのはやめなさい」

燈子 「お母さんの時だつて……、私がつと早く家に帰つてたら」

善太郎 「あれは仕方ないことだ」

燈子 「でも……本当は皆そう思つてる。母さんと喧嘩して……家出して……アンタだつて

本当は——」

善太郎 「だから、俺と話すの止めたのか」

燈子 「……私、本当は……、病院で……」

善太郎 「（クスツと笑う）なんだ……そんなことか……バカな娘だなあ……」

燈子 「ちよつと！」

善太郎 「何度でも言つてやる。お前はいい娘じゃなかった」

燈子 「善太郎……！」

善太郎 「だからせめて、いい母親になれ。お前ならなれるさ」

燈子 「……気が済んだら……、逝くの？」

善太郎 「そうだな。後の事、任せたぞ！」

燈子 「どうすればいいのよ」

善太郎 「自分で考えろよ」

燈子 「解んない」

善太郎 「？」

燈子 「私、頭悪いし、特技だつて無いし、仕事だつて……。

何だつてそうだよ。私に出来る事なんかないんだ」

善太郎 「燈子」

燈子 「どうせ私なんか、何やつたつて駄目なのッ！

そうよ……やっぱり、アンタより私が死ねばよかった」

善太郎 「……甘つたれた事言つてんじゃない！」

燈子 「……！」

善太郎 「……何やつても駄目だ？ お前が何をしてきたつていうんだ！？」

何かの本気で挑戦した事あるのか？ 負けて悔しいつて思った事あるのか？

家族を持った事があるか？ 誰かを本気で愛した事があるのか？

……親になつた事があるのか……？」

燈子 「……」

善太郎 「お前がやったことが無いことなんてまだまだいくらでもあるんだよ！

俺の半分も生きてないくせに、解つたような口をきくんじゃない！」

間

燈子 「……初めてだ……怒られたの」

善太郎 「失敗したつていいじゃないか。人間はな、失敗するように出来てんだよ。

俺なんかひどいぞ？ 人生で失敗しなかつた事なんて、たった一つしか無い」

燈子 「何？」

善太郎 「…母さんと一緒になった」

依子の写真を見つめる善太郎

善太郎 「素敵な人だった。…もうちょっと、一緒にいたかったんだけどな」

― 十一場 ―

照明が消える。

依子の写真だけが照らされる。

(回想・病院)

心電図の機械音。

地明かりが落ちて、クロスで依子の遺影だけが照らされる。

(医者) 「心不全です。肺炎からの合併ですね。血液の浄化が出来なくなっています」

(善太郎) 「今は眠ってるんですか？」

(医者) 「これね。ポンプの力で、目一杯血液を回してるんです。肺も、機械で…」

(善太郎) 「こ…、それ—— (これが…？ それじゃ…)」

(医者) 「最後の時間です。今のうちに、親しい方にはご連絡を。」

(ぼそりと) 申し訳ない」

遺影消えて、薄暗く照明が上がる。

背中を向けて、電話をかけている善太郎。

燈子は、うつむいたまま動かない。

善太郎 「ああ。うん。雨の中で、倒れとった。なかなか戻らんから心配しとったんやけど。

…娘がちよつとな。向こうの家には知らせた。難しいらしい…。

今夜…もう…、難しいって…もうダメなんやって…」

心電図が、その役目を終える。

力なく顔を上げる燈子

善太郎 「…依子…心配するな。俺、強くなるから…あの子の事、ちゃんと守るから。

心配するな…」

元に戻る。

― 十二場 ―

善太郎 「心配するな、お前なら大丈夫だ」

燈子 「……でも」

善太郎 「世界中の誰が何言ったって、俺はお前の父親で。お前は……俺の娘だ。

俺と、母さんの娘なんだから」

燈子 「お母さんと、アンタの……」

善太郎 「人間は……生まれ方も、死に方も選べない。選べるのは、生き方だけだ。

これは俺の経験から言える！それはもう確実に！」

燈子 「ねえ、なんで戻ってきたの？ お説教したいから？」

善太郎 「……勢いだけの人生だったからさ。こんな自分でも、

少しは……誰かを幸せに出来たかなあって思ってたな。

誰も悲しんでなかったらどうしようって心配で。

でも俺は……本当に……いい人生だった……」

燈子 「お父……」

燈子が顔を上げる

しかし、善太郎の姿がもう見えないらしい。

燈子 「善太郎……？ ねえ！」

善太郎 「燈子？」

善太郎を探し続ける燈子。

そこへ、正装した死神がやってくる。

善太郎 「……もう、見えないのか？」

死神 「未練を果たしたからですよ」

善太郎 「(納得)……無理言って悪かったね」

死神 「今回だけですからね」

善太郎 「……妻が亡くなってから、不安だった。あの子をちゃんと育てていけるのか。

俺……危なかったかもしれない。

父親業って難しくてね。これじゃ、妻にあつちで怒られるかな」

死神 「お待ちですよ。2LDKの天国で」

善太郎 「そんなに広いんならもう一人作ろうかな」

死神 「(笑う)」

笑みを漏らす善太郎。

善太郎 「とうとう……父親とは呼んでもらえなかったか」

死神 「彼女の人生はまだまだ長いです。いつかわかってくれますよ」

善太郎 うなだれる燈子に近づき

善太郎 「じゃあな。先にいつてるぞ。：・バカ娘」

善太郎 心を決めて死神に目配せし、死神の後をついていこうとする。その去り際に、

燈子 「お母さんによろしく……バカ親父……」

音楽が始まる。

凍り付いたように動かない善太郎。

涙をこぼすが、死神に肩を叩かれ、満足したように笑みを浮かべる。

その善太郎を優しく促す死神。

善太郎は、死神の励ましを受けて立ち上がる。

死神が仕草をすると、壁（もしくは舞台の出入り口）に光の扉が現れる。

一瞬眩しそうに目を閉じる善太郎。

目を開くと、光の先に懐かしい顔を見つける。

善太郎 驚きと嬉しさと照れくささが入り混じった表情で微笑む。

その口が動くが、声は聞こえない。

善太郎 「……来てくれたのか……」

善太郎 あらゆる不安から解放されたような優しい笑みのまま、まっすぐに光の中へ。

それを見届けた死神は、燈子に向かって丁寧にお辞儀をして光の中へ。

照明が地明かりへ。

燈子 一瞬だけ何かの気配を感じたように振り向くが、すぐに誰もいない事に気づく。

ポケットに入れていた紙を取り出して開き、善太郎たちの写真の間へ飾る。

それは『わたしのかぞく』と大きく書かれた、子供の落書き。

そこへ、仁太郎が和美を引き連れてやってくる。

どうやら反省しているらしい和美。後ろからは早苗と和美。

地明かりがフェードアウト。

それと同時に祭壇の上に飾られた、善太郎の笑顔の写真。母親の写真。燈子の絵だけ

が照らし出される。

そこには、幸せな家族の姿があった。

やがて、ゆつくりとフェードアウト。

終